

特集 ■ 法然上人八百年御忌、浄蓮寺開創八百年

念仏すけささぬ人(完)

— 角張成阿のこと —

高橋 富雄

孝養成阿念仏詩話

たとひ我仏たるを得んに地獄餓鬼
畜生あらば取らじ正覺
人天の寿^{いのち}を終へて三惡道
更^{さら}からんあらば取らじ正覺
國中の人天ことごと真金色
たるにあらば取らじ正覺

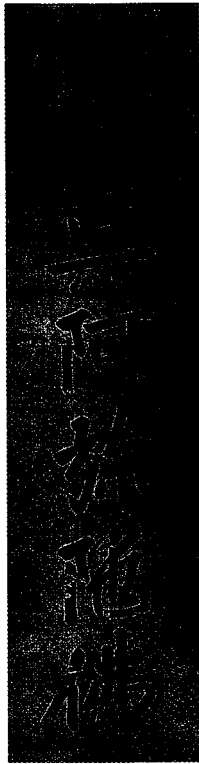
無三惡趣不更惡趣を宗^{しん}と立て
第十八願統べ撰^{あつ}むむなり
極惡の最下のための無上法
三惡道こそ正機なりけれ

寿^{いのち}の終へ非業所果の畜生變
孝養名号廻向成道

念仏ひとり立ちせさせてすけささぬ。角張成阿弥陀仏の最終章です。有終の美を濟す時です。念仏特別大賞「孝養の名号」を手に、故郷に錦を飾って、信州井上角張庄の故地に帰還していただくことにいたしました。

ほんとうは、悲しくて惨めで、ことばにもならない「レ・ミゼラブル」

になるよりほかない父子相会非情物語に定められていたはずのものです。しかしそれが、弥陀の大慈大悲の大きなみ光にいだきとられ、師上人の限りない慈愛に祝福されて、上人慈母妙海尼三十七回忌供養と時を同じうする「孝養の名号」の時賜にあ



孝養の名号
(大津浄光寺現藏)

ずかつて、亡父政氏畜生變生怨靈物語が人身生父政氏靈位往生聖變物語に変成するのです。浄土信州莊嚴の夜明けはそうして訪れたというのです。

無名の一向信心念仏者はここに「沈黙の金賞」に輝いたことになりました。型通りの祝辞はこの「すけささぬ念仏」にはふさわしくありません。そう思っ、わたくしも、経釋の聖句法語によって、和讃のようなつもりで「成阿孝養詩篇」を作詞してみました。「史話」にはなりません。

しかし「詩話」にはなるだろうと思ふのです。

「たとひ我」人天の「國中」の三首は、一読おわかりのように、四十八願の初三願の意訳です。

「無三惡趣不更惡趣を宗と立て」は、法然上人「三部経釈」の巻頭にこのことばを置いて、三惡趣がない、そこに更なることはないということをし、第一目標を立てて(宗と立て)、第十八願も王願になるのだとお示しに

なっていることに注意して下さい。外典の「論語」学而篇」でも「日に三省」のまとめとして「伝へて習はざるか」ときびしく自戒しているのです。「そう説き教えていながら、ほんとうに研學習得した上でのことなのか?」そういう自省です。

「十方衆生 至心信樂 欲生我國乃至十念」。第十八願いうところの「十方」は「三惡道」を起点としているのです。その「レ・ミゼラブル」は「至心信樂」しても「乃至十念」の道を知らないのです。第十八願。「人天以前」を忘れてはなりません。すべては「それからの

プロセス」なのです。「仏説汝なお一を欠く」いましめとして、「無三不更を宗と立て」ての十方衆生であることをきびしくチェックすべきです。

「極惡の最下のための」。「選択集」の名言です。「唯念仏の力のみありてよく重罪を滅するに堪へたり。故に極惡最下の人の為極善最上の法を説く」もの。それが念仏だとされているのです。「惡人正機説」の原点です。大事なことは、その「極惡最下の重罪」というのが、「地獄・餓鬼・畜生」の三惡道を、その「根源惡」

「原罪」として再認識です。人びとは、旧五千円札の新渡戸稲造の忠告を忘れて、センモンセンス(専門識者)の方々はそのことを怠つて、孝養成阿のようなコンモンセンス(自然智の常識)の方が、かえってコモンセンス(普通の智慧)に届いていることの「様なきやう」。「義なき義」を評価しかねていたのではないのでしょうか。ひとり立ちしてすけささぬ一向信心念仏者」はこの詩話を通して念仏最終の証し人になったのです。(東北大学名誉教授)

九回にわたった高橋富雄先生の連載は、今回で完結です。高橋先生の成阿論は、現在刊行中の著作集「高橋富雄東北学論集 地方からの日本学」(歴史春秋社)に収載されることになりました。